

保健学研究科特論における e-learning システムの試用

高倉 実

Minoru Takakura

琉球大学医学部保健学科

School of Health Sciences, Faculty of Medicine, University of the Ryukyus

西原町字上原 207 番地

207 Uehara, Nishihara Okinawa Japan 903-0215

概要

琉球大学大学院保健学研究科の授業である学校保健管理学特論を e-learning システムを試用して実施した。授業は文献を講読し当該テーマについて討論するという演習形式で行った。受講生はあらかじめ担当文献のレポートをクローズドな環境下の電子掲示板に掲載し、他の受講生がそれを見て予習すると同時に質問や意見を掲載して討論を進め、教室での対面授業に望んだ。受講生のうち、社会人大学院生の一人は仕事の都合で対面授業には参加できず、電子掲示板のみの討論参加となった。この試みでは、受講生が e-learning システムにより予習することによって内容の理解が深まり対面授業での討論も活発になったと思われるが、電子掲示板の参加だけでもある程度の議論が可能であることが示唆された。今後は e-learning システムにおいてさらに討論を深める方法についての工夫が求められる。

キーワード : e-learning システム, 社会人大学院生, 討論

Abstract

This paper reports an outline of a graduate school program “Advanced School Health Administration” implemented by using an e-learning system in School of Health Sciences, University of the Ryukyus. The main component of the e-learning system used in this program is the bulletin board system (BBS) in a closed environment, and members of the class discussed each other on the BBS. For adult graduate students in Okinawa, it is necessary to provide the e-learning programs.

Keyword : e-learning system, adult graduate students, discussion

1. はじめに

琉球大学大学院保健学研究科は 1991 年から大学院設置基準第 14 条に定める教育方法の特例を実施し、保健医療に従事している社会人の大学院におけるリフレッシュ教育、リカレント教育として広く社会人を受け入れてきた。最近、入学者に占める社会人大学院生の割合は 5 割を超えており、そのニーズはますます大きくなっている。これまでに、本研究科は夜間や特定の時間・時期に指導する機会を設けて社会人大学院生の教育を行ってきた。しかし、病院や保健所、臨床検査機関などの保健医療機関や学校などに勤務する保健医療専門職が忙しい日常生活の合間を縫って教育や研究を充実させるには、かなりの物理的・時間的制約があることは否めない。特に、島嶼地域である沖縄県に位置する本研究科の場合、離島に居住し勤務している社会人大学院生が本研究科

に通学して教育を受け研究を進めることは、現実的にはきわめて困難であることから、例えば、e-learning システムを利用した教育方法などを積極的に活用する必要がある。

本稿では、琉球大学総合情報処理センターで試験運用されている e-learning システムの Blackboard Learning System (以下、Blackboard)¹⁾を試用して、本研究科の授業の一つである学校保健管理学特論を実施した事例について報告する。

2. 授業科目について

今回、e-learning システムを試用して実施した学校保健管理学特論は、本研究科保健管理学分野の必修科目で前期に開講される。本特論では文献講読によって学校保健を構成する保健管理と保健教育および保健組織活動の内容につ

いて理解し、児童生徒の心身の健康状態や発育発達の実態とそれらに及ぼす環境や心理社会的要因の影響、健康問題に対する学校健康教育の役割、学校ヘルスプロモーションのあり方等について学ぶことを目標としている。

例年の授業の進め方は、関連学会が刊行する国際誌に掲載される児童生徒を対象とした原著論文を講読し、授業当日に当番の大学院生がレポートして、その内容に対して全員で討論を行う演習形式で進めている。担当大学院生のレポートには、当該テーマの選定理由、先行研究レビュー、目的・方法・結果・考察の要約、研究方法の詳細、研究の長所・短所、学校保健への寄与、報告者の私見などを含むように教示している。

原則として全員が教室に集合する対面授業を行っていることから、これまでは、離島に勤務する社会人大学院生が授業に出席することは困難であった。また、事前に教材となる原著論文のコピーを配付し内容について予習するように教示しているが、担当大学院生以外の予習の程度が浅くなるという問題点があった。

3. e-learning システムによる授業の進め方

Blackboard はコンテンツの作成および管理をはじめとするコースマネジメントシステム、受講生とのオンラインコミュニケーション、成績評価などを統合した強力な機能を持つが、本特論ではこれらの機能のうち、主に電子掲示板を用いたコミュニケーション機能を活用した。また、コース情報としてシラバスや授業スケジュールを掲載し、コース文書には補助教材として学校保健の概要等についての ppt ファイルを収めた。連絡事項のあるときはアナウンス機能および電子メールで一括送信して伝達した。

2005 年度の本特論は例年通り、文献講読と教室での発表および討論を行ったが、これまでの問題点であった予習について充実を図るために、各受講者は自分の担当論文およびレポート、追加資料などを各自の発表日の 1 週間前までに掲示板 (Blackboard コース - コミュニケーション - 掲示板 - Web discussion) にスレッドを作り掲載することにし、他の受講者はそれを見て予習すると同時に質問や意見をスレッドに追加して教室での対面授業に望んだ。

2005 年度の受講生は 6 名 (社会人大学院生 3 名) で、授業登録の時点で、社会人大学院生の 1 人が仕事の都合で対面授業に参加できないことが分かったので、電子掲示板のみの討論参加とした。また、各受講者が選定する教材論文は、琉球大学大学附属図書館から電子ジャーナルにアクセスして pdf ファイルとしてダウンロードできるものとし、レポートは pdf ファイルあるいは doc ファイルで作成しスレッドに添付ファイルとして掲載した。

以上のように、本特論における学習方法の種類としては、受講生が集合しての対面学習に加えて、e-learning システムを利用した、主に非同期型のリアルタイムでない

collaborative learning あるいは協調学習を用いたことになる²⁾。

4. e-learning システムによる授業の実際

受講生が Blackboard にログインすると図 1 のようなコース画面が表示される。指導中のコースにある学校保健管理学科論をクリックすることにより、本特論のトップページが表示される (図 2)。トップページの左にはメニューがあり、コース情報、スタッフ情報、コース文書、課題、コミュニケーション、外部リンクなどにリンクされている。コース情報はシラバスなどに、コース文書は補助教材にリンクしている。本特論では、コミュニケーションから掲示板に入り、そこで討論を行うようにした。

図 1 コース画面

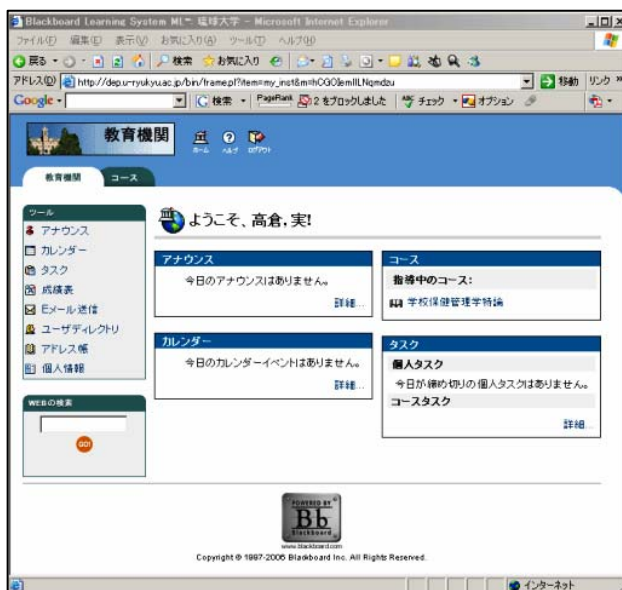


図 2 講義のトップページ

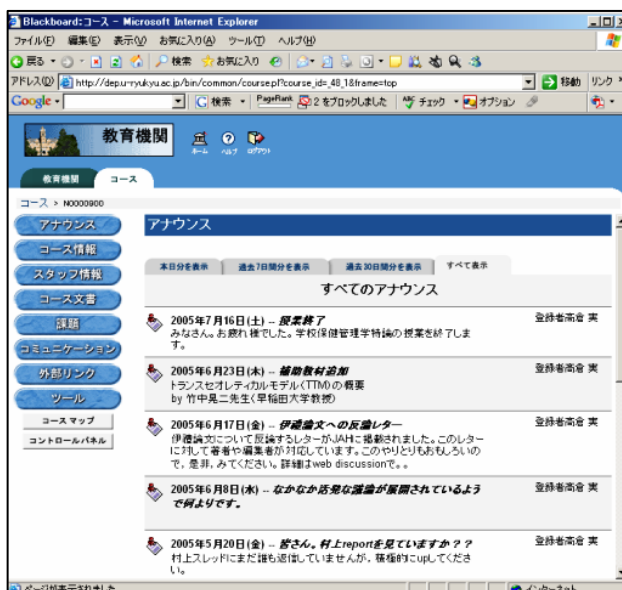


図 3 は掲示板に作られた各担当者のスレッドを示したものである。ここでは、上から 3 番目の対面授業に参加できなかった社会人大学院生のスレッドを展開している。スレッドのトップメッセージに教材論文が、次のメッセージにレポートが添付されていることが分かる。以下、レポートに対する質問やそれに

対する返信メッセージなど、このスレッドだけで 22 メッセージが投稿されたことになる。

本特論全体では、オリエンテーションを含めて 7 スレッドが作られ、合計で 126 メッセージが投稿された。

図 3 掲示板の画面

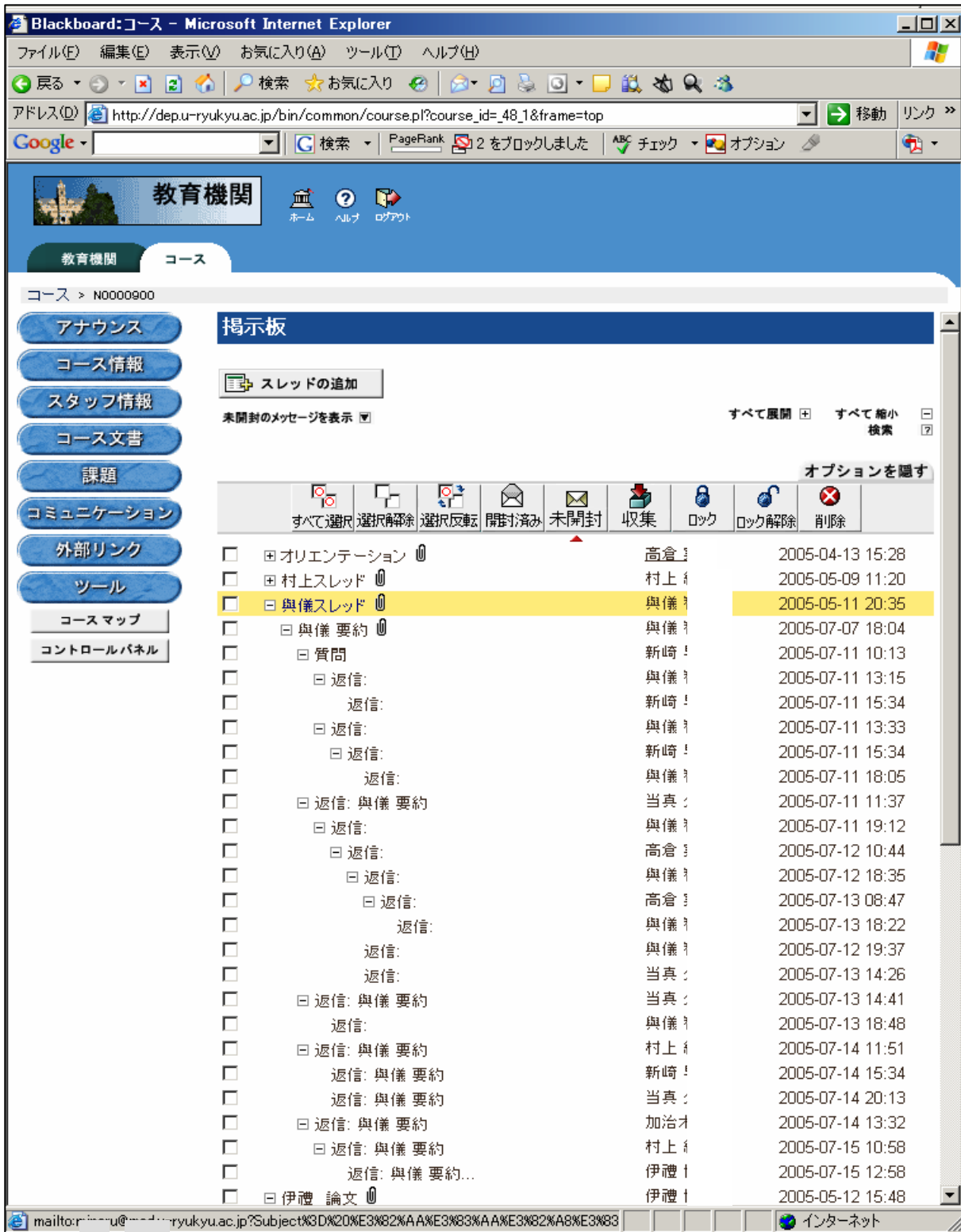


図 4 掲示板におけるメッセージの 1 例



図 4 に質問メッセージの 1 例を示した。これに対する返答などのやりとりが掲示板上で対面授業当日まで続いたために、予習効果はかなりあったと思われる。授業当日は、教材論文の内容についての理解も深まり、掲示板での応答だけではでこなかった質問や回答、意見が追加されるなど、討論も活発に展開された。受講生の事後感想にも、「電子掲示板でのディスカッションでは個人がまず思考を整理して文章化するので、議論の具体性、明確性において利点かもしれない」、「事前に掲示板上で話し合っているのだから、内容をいくらか把握でき、ある意味、予習になっていた」、「時間に関係なく参加する事が出来、他人の意見について考える時間がある」などの記述がみられ、電子掲示板での討論もある程度可能であることが示された。その他にも、時間を有効に使える、質問や回答を繰り返し見ることができる、文献が全て web 上にあるので紛失の心配がない等の e-learning の利点を評価する記述が多かった。

コース全体のアクセス統計をみると(2006 年 2 月 3 日現在)、全部で 7933 のアクセスがあり、時ごとのアクセス数では、15時のアクセスが最も多く、次いで14時、19時、10時の順でアクセスが多かった。曜日ごとのアクセス数では、授業前日の水曜日のアクセスが最も多かった。受講生の平均アクセス数は 781 であったが、電子掲示板のみの討論参加の社会人大学院生のアクセス数は 1358 で、受講生全体のアクセス数の 29%を占めており、積極的に e-learning システムを活用したことがうかがえる。また、17時以降のアクセスについては、受講生全体が 37%であったのに比べると、社会人大学院生は 57%~58%と多く、勤務後の夜間に多く利用していることが分かる。社会人大学院生が普段の仕事を続けながら受講す

るためには、やはり、夜間の利用が主なものになることから、時間と空間を縛らない e-learning システムによる教育方法はきわめて有効であるといえる。

5. 今後の課題と展望

今回の試みの問題点として、大学院生の IT 習熟度にばらつきがみられ、特に不慣れた社会人大学院生が操作に戸惑ったこと、外部 PC やネットワーク環境に制限があり大容量ファイルが利用できなかったこと等が挙げられる。今後は事前に受講生の IT スキルを向上させ、e-learning システムの使い方を詳細に説明する必要がある。また、指導教員はいくつかのスレッドにしかコメントできなかった。さらに活発な議論を引き出すためにも、e-learning におけるコミュニケーションの特性を考慮したファシリテイト能力を身につける必要がある。

筆者の研究領域である公衆衛生学・健康科学分野では、WHO と米国ピッツバーグ大学が共同で Supercourse³⁾ というオンライン学習システムを開発し、疫学や国際保健学を中心とした多くの講義が公開されている。また、わが国でも北海道大学が中心となって Supercourse Japan⁴⁾を開発し、疫学、老年保健、HIV/AIDS、国際保健などの講義を提供している。今後はこれらの教材を活用することも検討中である。

文献

- 1) <http://www.blackboard.com/us/index.aspx>
- 2) 中山和弘. e ラーニングの今後の方向性と可能性. 保健医療科学 2005;54(3):187-193.
- 3) <http://www.pitt.edu/~super1/>
- 4) <http://fox15.hucc.hokudai.ac.jp/index.html>